

学生の平和のための役割

J・W・フルブライト

(米国上院議員)

この数週間に数々のショッキングなニュースがあったが、恐らく、ケント州立大学四学生の死、ミシシッピ州のジャクソンでの

二学生の死ほどのショッキングな出来事はまれである。まともな米国人なら、この悲劇的で不必要な死を悲しむであろう。同様に、ベトナム、ラオス、カンボジアでのアメリカの若者たちの死は、悲劇であり、不必要である。いわば、これらの学生の死は戦争の犠牲であり、さらに残念なことは、この悲劇に対する米大統領の反応に同情の気持が欠けていたということである。

われわれのすべては、インドシナの戦争の拡大に不安をいだいているし、全国中の学生がカンボジア侵攻と北ベトナムへの爆撃再開に対して抗議している。ところが、少くともワシントンでの抗議の仕方は、この国はじまっていらいといっているほど印象的なもので、自発的で静かなものである。多くの若者が、自分たちに背を向けている政府に対し、怒りと幻滅を感じているときに、その若者たちの希望と信念に、冷く反応をも示さない政府要人に対して怒りをこらえ、暴力を抑えるのは、並々ならぬ抑制力を必要とすることであろう。またこのような時期に怒りを抑えることは、本当に困難なことであろう。しかしそのプロテストを、異議の申し立てに対してではなく、戦争に対して人びとに有効に呼びかけることは、きわめ

て肝要なことである。

この点は強調しておくべきであろう。というのは、学生の暴力によって利益をうけるのは、異議申し立てに対し、何か良い理由をみつけて、力で圧迫しようとしている人びとであるからだ。若者はよることで、その犠牲になると、このことは、それよりも危険なものである。暴力による異議申し立ては、暴力による抑圧をまねき、学生数人の犠牲で終るとは限らないし、悪ければ、米国の民主制度の破壊にまで発展するかも知れない。

第一だれがよることで犠牲者になるであろうか。戦争が進行し、ペリシテ人が自分の国を占領しようとしているときに、だれが栄光ある敗北への道を選び、勇敢であったという伝説を残すことを欲するであろうか。作戦を組織化することにより勝利するかもしれないときに、だれが負け戦さを欲するというのか。社会は変革を必要とし、変革で価値あるものを後世に残すことに成功する可能性はある。このきたない戦争に対する異議申し立ては、民主主義の表現以上のものがあり、また同時に民主主義への若者の参加となり、それに将来の戦争の犠牲より民主主義を救おうと欲するすべての人びとの再確認ともなるからである。

米国の若者に、戦争に対する抗議を続行することを希望し、激励

を送る。インドシナより最後の米兵が撤退するまで、抗議をつづけてもらいたい。しかし、異議申し立ての作戦の重要さをも強調しておきたい。

人びとのデモンストレーションによる表現だけに限定せずに、実業家、農民、労働組合が抗議を表現するために永い間効果的に使用したテクニクを、ワシントンにきた学生たちも使い始めている。学生たちは平和へのため、自分たちの代表者に、合法的、固執的であるが静かで秩序のある方法で自分たちの意見を知らせるようとしてロビイスト（圧力団体）になりはじめている。

そのようにして、代表制民主主義の伝統を遂行している。彼等は「愛国者」としてふるまっている、しかし、盲目的愛国者の使用する誤った「愛国者」ではなく、アルベール・カミュが定義した意味においてである。すなわち、真の愛国者とは、現状の国に対して最高の忠誠をささげるのではなく、国がどうあり、またどうあるべきであるかという自分自身の最善の考えに対し、最高の忠誠を示すという意味においてである。アドレイ・ステイブソンの定義では、正義に対してよることで戦うだけでなく、同じように正義を实践することであるという意味においてである。

いかに苦しくとも、政府の無反応な感覚が米国の学園内だけに限定されているのではないと知れば、興味を引くであろう。上院のわれわれの中にも、しばしばわれわれの意見が特定の人びとにしか伝わらないという感覚をもっている。数カ月以前のことだが、副大統領がわたしに「貴方の立場を理解しようと、この五、六年努力したのですが、残念なことにうまくいきませんでした」といっていた。わたしは彼の努力に敬意を表し、不成功を大変残念に思う。さらに残念で仕方がないことは、上院においても、われわれのうちに意見の通じない無能力が存在するということである。

わたし自身、戦争を論ずる外交委員会へ、あらゆる機会を通じ

て、権威があり説得力のある証人を招いている。ところが、この証人たちの証言は不幸にも、委員会室より外へは、ひじょうに興味ある発言でも、ニュース・メディアが発表に適している部分だけしか報道しないので、政治的影響力が失われてしまう。この点については、副大統領のアグニュー氏の述べた「恐らく、人びとに伝えるためのネット・ワークをもっとよく反応するように考慮する時期にきている」という言葉に賛意を表したく思う。

上院のわれわれだけでなく、アカデミックな社会にいる人びとにとつても、この馬鹿げた不道徳な戦争を終結させるために、いかにして国全体、大統領に通じるようにするかが問題である。現段階において、合理的議論以上のものが求められている、というのがわたしの意見である。求められているものは、不合理な論争でもなく、平和への前進よりも、平和への探求を害する暴力や不規則なプロテストでないことはいかに及ばない。問題は、現在の米國政治制度で認められている数々の方法を通じて政治的に圧力をかけること、すなわち、政治的作戦、運動、選挙、圧力団体による方法である。

時には望みがないように思われたときがあったかも知れないが、その効果のない異議申し立ての年月は重要であったと信じている。事態はどう発展するか予測することはつねに困難なことであるが、前政権の政策に対する学生と国民の確固たる決意がなかったならば、事態はもっと悪くなっていたのではないかと思う。ニュー・ハンプシャーの予備選挙の時に、実際のな政治活動をおこなった人びと「マッカーシー支持の学生」は、とくに忘れることができない。

活動的な、組織化された異議申し立てが、現状では指導者にとつて有力な束縛となり、それがインドシナでは悲惨な方向にまげられているように思える。皮肉に聞えるかも知れないが、わたし自身ただたんに哲学的理由によって、ニクソン大統領がジョンソン前大統領のエスカレーション政策を中止するようなことはないと思ってい

た。ニクソン大統領は、はじめは政治的動機もあったが、それはすでに失われ、いまや前任者の運命を忘れてしまっている。さもなくば、運命に流され、前任者と同じ政策を追求している。それでもなお国のトップなのである。倦怠、反復、単純ではあるが、平和の到来までこの戦争に反対しているわれわれすべてが不服を述べ、文句をいって議員に圧力を加えつづける。過去に例があることだが、もしそのことが悩みになるなら、昨年「一九六九年」一月八日のニクソン大統領の「米国民みなが外国における米国の干渉の全貌を知る権利がある」という言葉を思い起こすとよい。

米国のベトナム政策に効果的に学生が影響を与える方法論に関しては、わたしは旧来の制度的方法に依頼することがよいと強調したい。上院のある議員はカンボジアの敵対行動につかわれるこれ以上の支出を禁止する対外軍事品販売法であるクーパー・チャーチ修正案に支持を築き上げるよう努力している。他の上院議員は「悪名高い」トンキン湾決議案を廃棄するため努力している。平和へのために議会に圧力をかけたいと望んでいる学生、一般人は議会にいる代表この法律立法化を托せることが理解できると思う。

他の例を引くと、おそらく学生運動は、南ベトナムでの党派間に力を分割する原則とインドシナよりのすべての米軍の即時、段階的撤退を基礎とした大衆と議会の支持を築き上げるよう組織されるであろう。綿密なアプローチと組織計画がなによりも必要となる。戦争と同様に、異議の申し立ても成功するためには作戦が必要である。

若い革命家の「革命的」活動自体には危険はないと考えている。第一かれらには、人数、資金の技術、さらには急進的革命を起こす機会があるとは思えないからである。それよりはむしろ人並みでおびえた多数の人びとより支持を得ている右翼よりの反革命の成功の可能性がある。

わが国の歴史と社会の性格にゆがみがあるとすれば、左の方

向にはなく、右の方向にである。「無能な有識者」や「最近のくさったリング」、サッコ・バンセッティよりアルガー・ヒスにいたるわれわれの過去にある「赤い傷」は、社会的脅威となるまでには発展しなかったが、反共への反応が大きくなったことは事実である。過去の右翼への偏向は、共産主義に対する強烈で妄想的な恐怖、過去三十年間の慢性戦争によりもたらされた分裂、またその果てることのない戦争より生まれた軍・産・学複合体の勢力、国内の緊急問題処理の不成功、これらすべてが、米国民主義の重荷となっているのである。

最左翼は、一方にある偉大な力の集中に遭遇して、われわれの社会ではその意志をつらぬく希望はほとんどなく、その運動と同様な結果をもたらす右翼の民主主義を確実に破壊する反革命に直面する可能性が大いにある。すなわち、現在われわれの時代にアメリカの民主主義が打倒されるならば、それはベトナム旗をかかげた急進派によらず、アメリカの星条旗をかかげた右翼急進派になるであろうことを、あえて予言したい。

現存の制度をひっくりかえすことが可能であり、望ましいとしても、歴史によるとその結果はつねに困乱、災害以上のものにはならない。それはちょうどフランス革命、ロシア革命とその直後の困乱をみても理解できる。わたし自身現在の制度は、社会的性格もあり、りっぱなものだと考えている。またそれに賛成でなくとも、現在の社会を守るべきだというよい例がある。それは、かんたんにとだが、制度の破壊は、以前の制度よりりっぱになった例はなく、革命家の夢とは、およそかけ離れた結果になるのがつねだからである。

× × ×

動機と目的は極端に異なるが、社会革命を通じて社会をつくりかえるニュー・レフトの人道主義者は、自分たちのつくったコンピューターで社会を善導できると考えている社会学者、「力の責任」

を説く戦略家、「正義の戦い」と深淵な理論をはく神学者と共通な特徴がある。その特徴とは、自分自身の道徳的選択に対して絶大な自信を有することである。

わたしは「より高度な道徳律」をおこさせ個人をみちびく、極度の良心主義には魅力がなく、その良心は信用に値しない。人間の判断力には限度があり、重荷となりすぎる。合理化から完全盲従まで広がる曲解をまねく可能性が多いということは承知だと思し、また承知しておくべきだ。広い意味と目的では、わたし個人としては、良心に治められた社会より、法治社会がよい。理由としては、法律は不完全ではあるが、われわれ人間の特徴である独断、気まぐれ、横柄さよりわれわれを守る唯一の手段であるからだ。

正義、道徳での重大な問題はつねに「善悪の判断、進歩と退歩の判断を誰が決定するか」ということである。ハーバート・マルクーゼ教授の言葉によると、社会に対して唯一の判断をおこなう資格のある人は「人間として、自分の能力が成熟しており、合理的に独自で物事を考える能力を身につけた人ならだれでも」おこなえるといっている。マルクーゼ教授の社会の本質についての重要な洞察の全ての点に関しては、道徳選択の問題ですりかえがあるように思う。社会に対してそのような重要な決定をくだす資格のある特別の個人をどのように選出するかという問題で、みずから資格ありと名のりであるのか、それとも、資格なしと辞退するののか。まただれにそんな決定能力があるのか問いたい。

社会の道徳を決定する地位を得るためには、力を所有しなければならぬ。そして力を所有するほど、その人の決定力はゆがめられるものである。もし歴史が人に教えているところがあるとすれば、権力による墮落は、善人にも悪人にも起こりうることで、善人が善意でもっておこなった悪も、悪人が悪意でもっておこなった悪もなんら差がないということである。

人を危険で破壊的にするのは、何を考えているかということでは

なく、どのように考えるかに起因するのである。わが国がベトナムに足を入れたのも、指導者、知識人の支持、または道徳家や戦略家の意見ではなく、自分の予見と意見の正しさを唯一とするおごりに原因がある。熱心な社会改革者と戦略家や道徳救済者が軌を一にするところは、人間の本性とその独善性であり、また逃れられないものである。何故逃れられないかは、博学なハント判事のいった「自由の精神とは、正しさにあまり確信をおきすぎない精神である」という警告をよく心すべきである。

若者が自国の制度に敬意をいなくように強制されたときに感ずる懐疑心はわたしには理解できる。かれらは最近その制度の誤用、墮落のあまりに多くの例を見過ぎているのである。上院においてさえ同じことを経験している。一九六四年のトンキン湾事件、一九六五年のドミニカ共和国事件でさえ、われわれは欺かれたのである。サイミントン上院議員を議長とする特別小委員会でも明らかになったことだが、ラオスにおける米軍の介入の程度は、過去数年間、故意、計画的におこなわれ、われわれはだまされていたのである。現在のカンボジア侵攻戦争の再エスカレーションは、通告も権限の正当性もなく、最高行政官である大統領のたびかさなる議会および国民を欺瞞した行為であり、その結果は予測しがたい。そのいいわけとして使われる言葉が「クレディビリティ・ギャップ」で、この言葉はいい古された遠曲語である。

もし若者の多くが自国の制度に侮蔑を感じているのなら、その時にこそ最高レベルの人々がよい見本を行為で示すべきときなのである。しかしだれも、その手本に従う義務はない。暴力と無法にかんして恩寵を与えているリベラルが問題を難しくしているのだが、米国民主義の本来の姿を回復することである。望めば可能だ。民主制度が悪用されたことが判明し、その悪い制度を完全に破壊してしまうというのは、わたしにとって意味のないことのように思える。

わが国の民主主義のプロセスを通じ、異議申し立ての作戦を立てて実行できる可能性はいろいろある。行政過程を通じて、平和へのための圧力を加えることのほか、本年の選挙においても有望な作戦を実施できる。そのことは、政見発表演説会に参加し、平和への努力をおこなっている候補者を援助することである。本年の上院、下院、両院の全てとまでいかなくとも、多数の選挙において、予備選挙、総選挙の前の週末を、候補者のため、その人の支持を一般人より得るために五〇人、いや一〇〇人が選挙区応援者として働くことにより、結果は決定的に変化することになるであろう。忘れはしないだろうが、前大統領のベトナムでの戦域拡大を転換に導いたのはたんなる知的作業ではなかった。

× × ×

一九六八年の選挙でのベトナム問題は、われわれの望んだ方向へも、同然あるべき姿の回復という方向にも解決はしなかった。たしかに失望であったし、いまさらとり返しはつかないが、これからの選挙でわれわれの努力が建設的であれば果実をむすぶ可能性はある。家庭訪問、ビラ配りは、ワシントン行進、学生ストライキほど劇的でも、カッコいいことでもない地道なものだが、政治家が理解する言葉、すなわち票につながる言葉として通用するであろう。

ときには落胆を禁じ得ないこともあるだろうが、各家庭での静かな政治への異論が、インドシナでの戦争に終止符を打つもっとも強力な動機となるであろう。米国における秩序ある民主的な異議申し立ての真実の衝撃は、ハノイの政策立案者ではなく、現在の政策支持を大声で主張しているワシントンの政策立案者に対する衝撃がある。疑いもなく、われわれの異論申し立てにかれらが反対するものもこのためであり、そのために現在の戦争に反対しているわれわれも戦いをつづけなければならぬわけである。

『プログレッシブ』誌一九七〇年六月号所収

山口光朔・尾崎直身 訳